

タイトル：「アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究」（平成 21 年度第 1 回研究会）

日時：平成 21 年 7 月 19 日（日曜日）午後 13 時半より午後 6 時半

場所：AA 研 301 室

報告者名（所属）：1. 岩谷彩子（広島大学）「ディアスポラを問い直す―「ロマ／ジプシー」が分有する起源と共同体の現在」

2. 伊東信宏（大阪大学）「民俗文化のエコロジー：ルーマニア、ロマのブラスバンド顛末」

1. 岩谷彩子（広島大学）「ディアスポラを問いなおす―「ロマ／ジプシー」が分有する起源と共同体の現在」

「ディアスポラ」は移住や植民をあらわすギリシャ語に由来し、祖国を失い、離散して生活する人々を指す言葉として用いられてきた。そのなかには、アラブ人、ユダヤ人、南アジア人のように旅や交易によってネットワークを築いてきた人々が含まれる。彼らの活躍は現代の「グローバル化」に先んじる「非統一的な下からのグローバリゼーション」[クリフォード 2002(1997):313]であった。ところが 1990 年代以降、移民や難民、および多様な背景のトランスナショナルな人々が大量に発生し、国境を越えてグローバルに結びつく時代となり、ディアスポラ概念は新たな事象や人々をまきこみ拡張している。本報告の目的は、拡張するディアスポラ概念について先行研究を概観し、トランスナショナルなマイノリティとして知られる「ロマ／ジプシー」の事例から、ディアスポラ概念がもつ新たな理論的な地平を引き出すことにあった。

ディアスポラ概念の有効性は次の点にある。それは、土地や領域を基盤にした人間関係や、血縁や経済的利害による結びつきを超えて、想像上の郷土を共有する人々による共同体のあり方を考察できる点である。ディアスポラの歴史は、単一の文化や地域にもとづく人々のアイデンティティのあり方を問い直す。ギルロイ[2006(1996)]が述べるように、ディアスポラにとっての歴史とは土地や人間関係からの切断と再節合の動態そのものなのである。

いま、ディアスポラ研究に求められている課題は、ディアスポラの歴史を共有する人々の結びつきが創出されたり、すれ違う過程を明らかにすること、いわばいかにディアスポラの言説が生きられているのか、という点を精査することにある。たとえば、シオニズムに見られるように、故郷を失った離散の歴史が繰り返し共同体内部で強調されることで「ディアスポラ化」がイデオロギー装置に、あるいはフェティッシュになるとき、想像上の「故郷」の多様性が隠蔽されてしまう。その一方で、シオニズムを否定することも、ディアスポラを生み出した権力の問題を封印することになりかねない[ボヤーリン&ボヤーリン 2008(2002)]。ディアスポラを生きる人々の日常世界の研究からは、トランスナショナル・コミュニティへの帰属感や、移住によって生じたトラウマといったディアスポラ研究で指摘されてきた見解に対する疑問も提出されている[ハージ 2007]。

「ロマ／ジプシー」の事例は、移民研究、ディアスポラ研究、いずれの議論からも取り残されてきた。その理由としては、第一に「ジプシー」の起源や散在といった歴史の共有度の低さ、第二にトランスナショナルな「ロマ／ジプシー」同士の齟齬、対立、無関心、まとまりの悪さ、が考

えられる。

たとえば、20 世紀後半になって生じたジプシー国家建設案にみられるジプシー・ナショナリズムや統一ロマニ語の推進は現在も難航している。この背景には、異なる背景をもつ「ジプシー」諸集団間の差異や、非ジプシーと交渉し政治的なリーダーシップをとろうとするいわゆる「インテリ・ジプシー」に対する「その他」の「ジプシー」たちの根強い反感や不信感、さらには受入国との調整の問題がある。また、ペンテコステ派キリスト教への改宗の動きなど宗教による共同体創設の試みにより、世界の「ジプシーの兄弟」に対する意識は高まったが、「ジプシー」諸集団間の差異を伸張する形で改宗が進んでいるに過ぎない。

「ジプシー」として彼らがヨーロッパに知られるようになって以来、エジプト、ボヘミア、インドと、彼らの起源は常に非ジプシーによって与えられ、彼らはそれを流用してきた。むしろ起源を曖昧にしておくことこそが、彼らの生存基盤の創出となってきたのである。したがって、「ロマ／ジプシー」の起源や散在の歴史を探る試みは、彼らの「現在」にとって意味がないばかりか、逆に彼らの現在を脅かすことになりかねないのだ。

彼らのあいだで近年流行しているのは、言説化された「故郷」に依拠しつつ、実際に帰還を求めたり故郷をフェティッシュ化しない音楽や映像による自己表出である。そこでは、故郷としてのインドが意識されながらも、インドに帰還しようとする意図はみられない。むしろ、さまざまな土地の音楽要素を融合させた「ジプシー」音楽にとって、「インド的なもの」は触媒となり、さらなる融合を促進している。そしてそのような営みは、非ジプシーのまなざしや要請を十分濾過した上でなされているのである。このように、帰還の対象ではない不確実な「故郷」をはじめとして、いかなる安定した実在にも依拠しないで、ゆるやかに共同体意識を構築する彼らのあり方は、ジャン＝リュック・ナンシーのいう「無為の共同体」に近接する。

本報告では起源の問題に焦点を当てたため、十分に論じることができなかったが、たとえばフランスやギリシャでは、流入した歴史の違いによって集団間関係や婚姻関係の違いが挙げられる。今後も、彼らが現在取り結んでいる非ジプシーとの、あるいは「ロマ／ジプシー」同士のネットワークに着目し、単一の「故郷」や「文化」を必要としないディアスポラ共同体がいかに可能か、その生成過程を明らかにしていく必要がある。

2. 伊東信宏(大阪大学)「民俗文化のエコロジー:ルーマニア、ロマのブラスバンド顛末」

1990 年代後半あたりから、バルカン半島一帯に広がる村のブラスバンドの音楽が注目されている。欧米や日本の聴衆が、この種の音楽に気づいたきっかけは 1995 年の映画『アンダーグラウンド』(E.クストリツァ監獄作品)だった。第二次大戦から 1990 年代に至る旧ユーゴの戦争を半ばコミカルに半ば悲痛に描いたこの作品のほぼ全編で、セルビアのロマが奏するブラスバンドの音楽が鳴り続けた。

この映画の後、しばらくセルビアばかりではなく、ブルガリアから、ルーマニアから、マケドニ

アから、続々と村のブラスバンドの音楽が発掘され、CD化される。さらに、東南アジアやアフリカなどにおける西洋音楽のコロニアルな形態としてのブラスバンド的音楽への関心も相まって、こういった音楽は一種のブームとなり、ついにはルーマニアやマケドニアの村の楽師たちが日本にツアーにやってくるまでに至った。

2000年夏に初来日した「ファンファーレ・チョコリニア」は、そのような文脈で注目されたバンドの一つである。本発表では、彼らの東京での公演に対して、発表者本人が書いた新聞評を紹介し、さらにこの評に寄せられた拒絶反応をもあわせて紹介した。

そのような経緯から浮かび上がってくるのは次のような問題である。まず、現代の消費システムの中で、ある特定の民俗文化が突然脚光を浴び、商品化され、篡奪される、ということが起こりうる。彼らはギャラや印税を受け取り、聴衆はそれまで知らなかった種類の文化にチケット代やCD代を支払って触れることができ、経済的な交換は成立している。しかし、ブームが過ぎ去った後、地元で細々と、営々と続けられてきた民俗文化のシステムが狂ってしまい、その存続が危機に瀕する、という可能性がある。その意味で、これは持続可能性をめぐるエコロジーの問題に例えることができる。

発表では、彼らが儲けたお金で村に教会を寄付したことなど、その後の顛末についても触れた。また、発表者の関心に近い発想で最近設立されたオーストリアの「フェアミュージック・イニシアティヴ」の活動についても簡単に紹介した。